日野市立教育センター所報

教育センターだより

第４８号　令和３年１月２２日発行

日野市立教育センター	わかば教室
〒191-0042　東京都日野市程久保 550 番地	〒191-0042　東京都日野市程久保 550 番地
電話　042-592-0505　　Fax　042-592-1148	電話　042-592－0863　Fax　042-592-1148
午前 8 時 30 分から午後 5 時 15 分	午前 9 時から午後 4 時
休館日：土曜日、日曜日、祝日、年末年始	休業日：土曜日、日曜日、祝日、年末年始

教育センターだより第 48 号の発刊にあたって

日野市立教育センター所長　　正　留　久　巳

「失敗は成功より尊い」

はやぶさ 2 号機は､サンプルリターンを初号機に続き成功させました｡この明るいニュースは、コロナ禍の日本に元気と勇気を与えてくれました。はやぶさ初号機は幾多の困難を乗り越えて地球に帰還し多くの感動を呼びました。その経験を 2 号機は見事に活かしたといえます。日本は、初めての人工衛星を 1970 年２月 11 日に打ち上げ､「おおすみ」と名づけました。大きさは約 24kg の小さな衛星でした｡ロケットはラムダ４Ｓという４段式のロケットで､５号機で成功しました。つまり、４号機までは失敗の連続であったということです。研究者は次のように言っています。「こうして振り返ってみると、実にいろいろな予期せぬことが起きたものである。この間そうした失敗のひとつひとつを克服するために、多くの涙ぐましい努力が続けられた。しかし、後の輝かしい日本の宇宙開発の基礎は、この最も苦しい時期の忍耐にあったような気がする。苦難に耐え、難しい障害をみんなで乗り越えていく過程で、ロケット・チームの団結、日本の宇宙時代を築くための貴重な戦力が出来上がったのだった。『失敗は成功よりも尊い』のである。」また、次のようなことも言っています。「幾多の曲折を経た L-4S であったが、問題の所在を明らかにし、その解決の途を切り開いていったことで、確固たるロケットの技術を育てる土台を築いたものということができよう。単に初の人工衛星を産んだということではなく、多くの貴重な知識と経験を残した実験として記憶されるべきものと思う。」

どの分野でもそうですが、成功は努力して得るものです。しかし、時として偶然に得た成功には、その中に次の大きな失敗が潜んでいることもあります。失敗から学び、チャレンジしていくことの大切さを改めて考えさせられます。あきらめず粘り強い日本の科学者のように、日野の子供たちが主体的な学びを身につけ、自分の夢にむけ、失敗を恐れず進んでいくことを願っています。

Ⅰ　調査研究部

調査研究部では、「理科教育推進」「郷土教育推進」の研究を行っています。

１　理科教育推進の研究（理科教育推進研究委員会）　　教科等教育係

理科教育推進研究委員会では、研究主題と日々の授業を「ひのっ子が主体となる理科授業」とするために、今年度も取り組んでいます。昨年度、一昨年度と市内２か所の露頭を活用した小学校６年理科「土地のつくりと変化」の単元の展開について紹介してきましたが、より実感を伴った学習として「海の生物の化石」を教材として活用できないかと研究を進めています。

（１）「化石」を教材とするわけ

これまでも日野市周辺ではクジラなどの海獣類や海の貝の化石が報告されています。これらは、日野の大地が大昔に海で堆積した地層からできていることを表しています。しかし開発の進んだ都市部においては、子どもたちが容易に化石を発見できる露頭は身近に存在しにくく、教科書や映像教材に頼ることが多くなっています。そこで、改めて過去の文献を手掛かりに、多摩川の河床に露出する上総層群（かずさそうぐん）の地層に着目し、化石を安全に採取できる場所を探すことにしました。

（２）多摩川河川敷で化石の採集できる場所を探す

日野は、海底で堆積した上総層群（かずさそうぐん）の地層が隆起してできた土地を、浅川や多摩川が削り取ってできました。今では住宅地として多くが開発され、地層の観察できる露頭はごくわずかとなっています。また化石の採集となると、これまで紹介してきた百草地区、平山地区でも困難な状態です。そこで、広く地層が露出している箇所として、多摩川の河床及び河川敷に目を向けることにしました。標本採集地については、『松川「多摩川中流域に分布する上総層群の残された問題の解決、総括的研究と地質野外実習教材の改定、2016」』を参考に、**図―１中の A～E** 地点を選定しました。

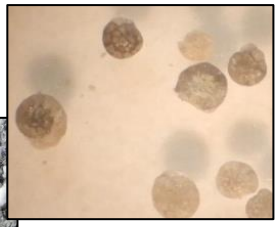
図－１　多摩川河川敷の採集地域

その結果、E 地点で貝化石の密集する地層が発見され、その泥岩層からは微化石の有孔虫の化石が採取できました。

（３）化石採取地点と産出化石の様子

図―２　河川敷に広く露出する稲城層（Ｅ地点）

図―３
稲城層中の貝化石



図―４
稲城層中の
有孔虫化石

＜2020 年 11 月 26 日撮影＞

多摩川右岸、立日橋の上流側には日野の土台を形成する上総層群の稲城層が、図―２のように広く露出しています。橋の上流 150m程の泥層からは海に棲む貝化石の密集状態が見られ(図―３)、その母岩となる泥層からは海の底に棲む有孔虫の化石(図―４)が見つかりました。これらのことから、この地層は海に堆積したものだということが分かります。

近隣の学校なら校外学習として実際に採集に行くことができますし、それができない学校にはサンプルを配布することで化石に直接触れることができます。地域に根差し、実感を伴った学習となるように、現在指導計画への組み込み方や効果的な活用方法について検討を進めています。来年度の学習に活用してもらうことを目指しています。

２　郷土教育推進の研究(郷土教育推進研究委員会)　　ふるさと教育係

郷土教育推進研究委員会では、研究主題を「**郷土への愛着を高め、地域と共に生きようとする児童の育成** ～日野市の郷土関係機関や人材との連携を通して～」と掲げ、「郷土日野との出会い、ワクワクの 45 分」を研究のイメージとして取り組んできました。

（１）　研究方法とテーマ

研究方法は各委員を４グループに分け、グループ毎にテーマを設定し、授業実践を通じて実証的な研究を進めてきました。研究テーマと研究で得られた課題は次の通りです。

・A グループは、「郷土への愛着を深める実践」をテーマとし、「委員以外の先生方にも郷土教育の授業を行っていただくには」が課題になりました。

・B グループは、「主体的な学びから、郷土にふれ、郷土を愛する子供たちの育成」をテーマとしました。課題として、子供たちの「興味・関心を一過性にしない」「理解できる形に変換する難しさ」や「郷土を愛する児童のイメージ」「資料へのアクセスの困難さ」があがりました。

「活気ある郷土教育推進研究委員会」

・C グループは、「郷土教育を活用した授業実践と教材づくり～新しい見方・考え方を意識して」をテーマとし、郷土

教育と各教科を関連付けた授業づくりに取り組みました。郷土学習と教科の目標とをいかに近づけるかが課題としてあがりました。

・D グループは、「郷土への関心、理解を深め、郷土への愛着を育む教材の開発を目指して」をテーマとし、課題としては「資料に対する教員の理解が必要」「資料を活用できる共有の場とその周知」があがりました。

※　コロナ禍のために、毎年実施していた夏季フィールドワーク研修（今年度は百草地区を予定していた）は、残念ながら中止にしました。

（２）１課４館との連携　（生涯学習課、図書館、中央公民館、郷土資料館、新選組のふるさと歴史館）

令和２年度はコロナ禍のために、七生の冊子を活用した市民との「まち歩き」が開催できなくなりました。その中で１課４館が結集し、日野市の文化財や自然を取り上げ「動画」「プレゼン ソフト」等を駆使して学校へ配信しました。小中学校の先生方が授業の合間にも見られるようにとコンパクトにまとめました。20 テーマ以上が校務支援のリンク集にアップされています。

みんなで稲の刈り取り

中でも、生涯学習課文化財係の「遺跡の紹介」、図書館の「市内の図書館」、郷土資料館の「1964 オリパラのレガシィー」、新選組のふるさと歴史館の「新選組について」及び教育センターとわかば教室の「平山陸稲の栽培体験」をぜひご覧いただければと思います。動画の作成については、中央公民館が撮影・編集を担当し好評を博しております。

（３）『歩こう 調べよう ふるさと七生』の第３版へ

令和３年度の新３年生へ向け配布する七生の冊子の校正･編集を行いました。大きな変更点は、「年号」が先に書かれていたものを、教科書に合わせて「西暦」を先に書き換えたことです。

（４）令和２年度 第６回 若手教員（１年次）育成研修の支援

コロナ禍のために、野外でのフィールドワークを予定していた若手教員育成研修(11 月)も、屋内での講義形式の研修に変更になりました。

東京都埋蔵文化センター調査員の講義

若手教員 集中！

参加者から、「実際に土器に触れることができた貴重な体験ができた。」「外部機関との連携の大切さが感じられた。」等の感想があり、先生方の熱い想いを呼び起こす研修会でした。

Ⅱ　研修部

教職員研修係

研修部では、日野市教育委員会学校課が計画した研修事業を支援する業務を行っています。

１　若手教員育成研修（１・２・３年次）

研修担当所員は若手教員が在籍する学校を訪問し、授業観察及び指導を行っています。

（１）１年次教員の授業観察における指導

主な観点は、学習指導案が適切に作成されているか、児童・生徒と良好なコミュニケーションがとれているか、授業では、説明を児童・生徒の理解度を把握しながら分かりやすく行っているか、発問のタイミングが適切で、児童・生徒の考えや意見を引き出しているか、板書では計画性があり、学習の流れを示したものになっているか、ICT 機器の適切で効果的な活用がみられるか、などです。担当所員は、よかった点や課題を示し、次の授業に向けた改善策を話し合いながら指導に当たっています。

２回目（９月頃）の授業観察では、１回目の時よりも落ち着きや安定感が増し、授業の流れも円滑になっていることを感じました。３回目の授業観察は１２月から １ 月にかけて実施します。

（２）２年次教員の授業観察における指導

１年次の成果と課題を踏まえ、２年次の指導に当たっています。主な観点は授業のねらいが明確であるか、授業の流れにメリハリがあり、山場を明確にした授業展開になっているかで、実践例を示すなど具体的な指導に努めています。また、興味・関心を高める教材の開発、ICT 機器を有効に活用するための助言も行っています。若手教員の２年目の確かな成長を感じることが多く、校内におけるＯＪＴの成果も感じます。

（３）３年次教員の授業観察における指導

３年次教員の場合、次のような観点で指導を行っています。主体的で、対話的で、深く考えさせる実践的な授業を目指し、問題解決型授業への取り組みがみられるか、コミュニケーション能力を高め、表現力を育成しようとしているか、児童・生徒の興味・関心を引き出す教材・教具の開発をしているかなどです。また、外部との連携や学校の組織的な動きにも触れながら指導に当たっています。３年次若手教員の大きな成長を目の当たりにするとき、本人の日々の努力はもちろん、多くの先輩教員による地道で丁寧な指導があったことを強く感じます。

２　夏季全体研修会、若手教員育成研修（２年次）

毎年､教育センター所員も日野市教育委員会と協力して受付等の支援を行っています｡しかし、今年度は、夏季全体研修会は実施されず、また、２年次の若手教員育成研修会（センター所員も指導助言に当たっていた「半日研修」）も感染症予防対策のため中止となりました。

３　教育課題研修会

夏季休業中の課題別研修会は感染症予防対策のため中止されたものが多く、実施された「理科実技（基礎)」､「がん教育に関する研修」などの研修会の受付業務を行いました。

Ⅲ　相談部　　学校生活相談係　「わかば教室・学校生活相談」

相談部は、学校生活相談係が「わかば教室」の運営と「学校生活相談（主に長期間の欠席状況にある児童・生徒について）」を行っています。

1　「わかば教室」の取り組みと児童生徒の状況

「一人ひとりが各自のペースで心や体のエネルギーを蓄える場所」

一人ひとりがそれぞれのペースで自分の時間の過ごし方を自分で決めています。

令和２年度　わかば教室　時間割(第１版)　R2.6.8~

曜日／タイム	月		火		水		木		金	
	小学生	中学生	小学生	中学生	小学生	中学生	小学生	中学生	小学生	中学生
9:20~9:30	朝の会									
タイム1 9:30~10:10	算数・数学（橋本）		eラーニング（酒田）	英語（塚崎）	国語（藤原）	国語（田中）	eラーニング（酒田）	総合活動（星野）	算数・数学（橋本）	
タイム2 10:20~11:00	英語（藤原）	英語（塚崎）	SST（塚崎・藤原・星野・清水）	eラーニング（酒田）	算数・数学（橋本）		総合活動（田中）	eラーニング（酒田）	国語（藤原）	国語（田中）
タイム3 11:10~12:00	わかばタイム〔作文〕（池本）		わかばタイム〔スポーツ〕（星野）		わかばタイム〔音楽〕（塚崎）		わかばタイム〔栽培〕（井口）		わかばタイム〔図工〕（橋本）	
昼食・昼休み ~13:15			掃除 13:00~13:15						掃除 13:00~13:15	
タイム4 13:15~13:45	総合活動（田中）	学習支援 わかデミー	学習支援 わかデミー	学習支援 わかデミー	帰りの会 13:00~13:10		SST（塚崎・藤原・星野）	SST（田中・橋本・酒田・清水）	学習支援 わかデミー	学習支援 わかデミー
タイム5 13:55~14:25	小学生 帰りの会	学習支援 わかデミー 中学生 帰りの会	小学生 帰りの会	学習支援 わかデミー 中学生 帰りの会	申込eラーニング 14:00~16:00（酒田）		小学生 帰りの会	中学生 帰りの会	小学生 帰りの会	学習支援 わかデミー 中学生 帰りの会

※　木曜日のわかばタイム（栽培）の時間は天候等より変更することがあります。

(1)　わかばタイム

小学生と中学生が合同で授業をします。

「作文」俳句・詩・小説創作

「音楽」ハンドベル演奏

「栽培」野菜の栽培

「スポーツ」球技・ゲーム

「図工」陶芸・版画・水彩画

基本的な学習を個人のペースで少しずつ進めています。

(2)　わかデミー(学習支援)

自分がやりたいことを自分で考えて決める(自主性・主体性を育てる)ことが目標です。今ここでしかできない学びや探究を進める時間となっています。

☆考える→計画する→実行する→振り返り→表現する→やり方を工夫する→共有する

【　児童・生徒のわかデミーの取り組み　】

小説　水彩画　散策スケッチ　楽器演奏　書道

折り紙創作　木版画　焼き物(陶器)　コンピューターグラフィックス

(3) ＳＳＴ(ソーシャル・スキル・トレーニング)

自己認知スキル、コミュニケーションスキル・社会的行動が身につくためのトレーニングをしています。具体的にはゲームやエンカウンターワークシートを使って自分の考えや他の人の意見を聞き、自分自身を客観的に見つめる場面を作っています。また今年度の傾向として他者とのコミュニケーションが苦手な児童・生徒が多いため、少人数でのグループトークも行っています。この時間を楽しみに通室してくる児童・生徒も多くいます。

(4) ｅラーニング

ｅラーニングは火曜日と木曜日の週二回行っています。一人一台のＰＣを使い、インタラクティブスタデイ(国、数、英、社、理)タイピング、ペイント、プログラミング、Ｗｏｒｄのいずれかを自分で選び、取り組んでいます。プログラミングを通して先を見通す力や、工夫して考える力がついてきます。その日の自分の状態や気持ちに合わせて活動内容を選ぶことが出来ることもあり、参加できる児童・生徒が増えてきています。また他の児童・生徒の活動を見て「真似してやってみよう」という場面も多くあり、児童・生徒同士のつながりも感じられる時間となっています。

(5) 行事

今年度実施できた行事

①多摩動物園への校外体験学習

②誕生日会　③スポーツ大会

④陸稲(おかぼ)の田植え、案山子づくり、稲刈り体験

⑤学習発表会

２　カウンセラーによる相談

わかば教室では、通室してくる児童・生徒（以下、子供たち）の一人ひとりの状況に応じて丁寧に寄りそっていくことを目標としています。集団を苦手とする子供たちが多くいます。また、保護者の方々の不安や悩みも少なくありません。保護者の方の不安や悩みを少しでも和らげることができるように随時相談を受け付けています。

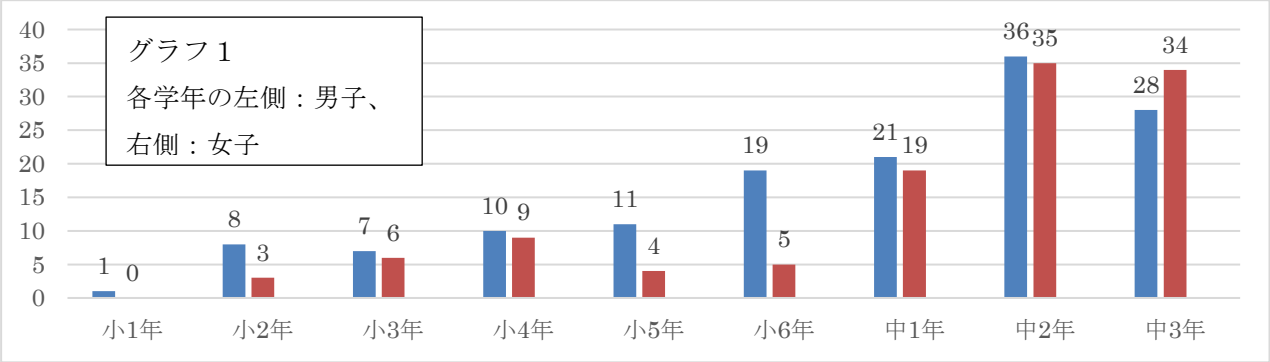
３　学校との連携

学校とわかば教室との連携は、極めて大事です。わかば教室に通っている子供たちは、学校(所属校)とのつながりを求める気持ちがとても大きく、「学校とのつながりがある」「学校にも自分の居場所がある」ことを感じられることが、子供たちの心の支えとなります。「放課後に面談の場面を作る」「電話で近況を聞いたり伝えたりする」「手紙や伝言メッセージを届ける」など、わかば教室では学校による様々な取り組みや対応に感謝しています。子供自身から返事がなくても担任の先生の思いは届いています。今後も、子供たちと関わる時間を作ってほしいと切に願っています。

また、わかば教室と学校間では、毎月「わかば教室通室状況報告書」を作成し、相互の連絡を通して、情報の共有化を図り、個々の児童・生徒への指導に活かしています。併せて「わかば教室連絡会」と「学校訪問」を年に二回実施し、学校との連携を密に図っていきます。

４　11 月分出席状況調査集計より　　登校支援コーディネーター

（１）　令和 2 年 11 月末現在 30 日以上欠席した児童生徒数（グラフ 1 参照）



① 11 月末現在 30 日以上欠席した児童数　　83 名（男子 56 名　女子　27 名）

② 11 月末現在 30 日以上欠席した生徒数　　173 名（男子 85 名　女子　88 名）

③ 11 月末現在 30 日以上欠席した児童・生徒数 256 名（男子 141 名　女子 115 名）

④ 30 日以上の欠席者のうち 90 日以上の欠席者数

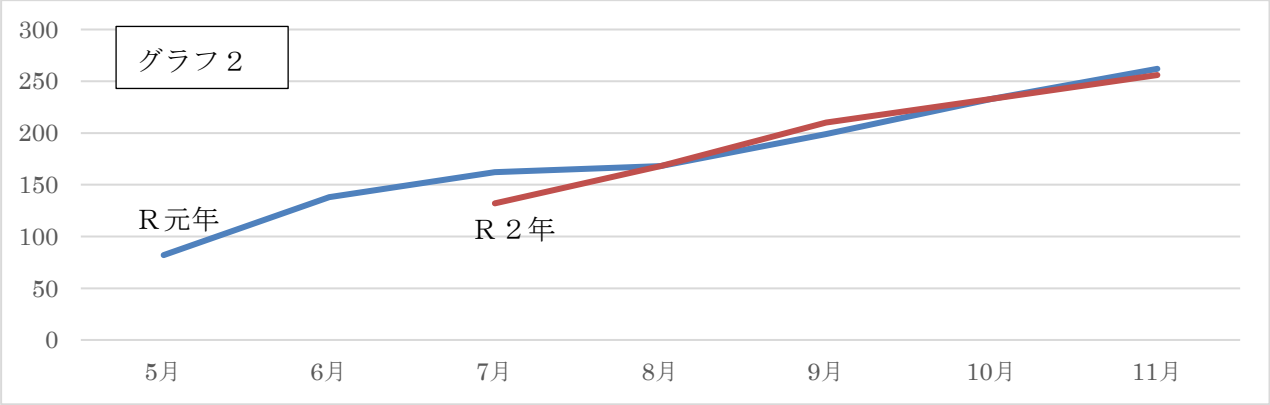
・児童 83 名中 35 名　（42%）　・生徒 173 名中 104 名（60%）

⑤ 早期対応を必要とする欠席日数 13 日～29 日の児童・生徒

・51 名（児童 27 名　生徒 24 名）

（２）　30 日以上欠席児童生徒数の出現数推移の昨年度との比較（グラフ 2 参照）

※新型コロナ感染を防ぐため令和 2 年度は 6 月 15 日より通常登校・通常授業開始



R元年	82 名	138 名	162 名	168 名	199 名	233 名	262 名
R２年	―――	―――	132 名	168 名	210 名	233 名	256 名

※令和 2 年 7 月の 30 日以上欠席者の出現数は、緩やかな学校再開の影響もあり、昨年より 30 名少なかったが、8 月より大きな違いは見られなくなってきた。

（３）　出席状況調査の読み取りの中から

① 学校による児童生徒、保護者（※父親との相互理解、連携・協力も大きい）への支援、働きかけ等様々な取組みが工夫されている。

② 校内委員会による検討を受けて、専門家（ＳＣ，ＳＳＷ、心理士、医師等）や関係機関（ステップ教室、リソースルーム、わかば教室、子ども家庭支援センター、エール、児童相談所等）との連携が進んできている。

※在籍校での児童生徒の個々の状況を見ながらきめ細かな対応がなされていることにより、出席日数が増えている児童生徒も見られる。